

ブエノスアイレス市立「アストル・ピアソラ」音楽院における

アルゼンチン・タンゴ

—音楽専門高等教育の多様化に向けて—

Argentine Tango at “Astor Piazzolla” Music Conservatory in Buenos Aires: Diversifying Music Higher Education

東京学芸大学大学院 連合学校教育学科研究科 博士課程

ガサーノ アラン (GAZZANO, Alan)

要旨

アルゼンチンでは、社会的・文化的な多様性が現代教育に反映されるに伴い、音楽専門教育でも新たな資格・能力が要求されている。それゆえ、近年では、西洋芸術音楽に偏重した 19～20 世紀の教育モデルからの脱出が試みられ、より幅広い学びが推進される中、アルゼンチン・タンゴの学習も強化されてきた。本研究では、同国のブエノスアイレス市立「アストル・ピアソラ」音楽院における学習内容の多様化の一環として、教育課程内のタンゴの位置付けを検討する。そのため、タンゴやアストル・ピアソラ (1921-1992) の音楽の学習に焦点を当て、同音楽院の現行カリキュラムを調査する。また、ピアソラの生誕 100 周年を記念する取り組みにも着眼する。結果として、タンゴとピアソラの音楽が市立音楽院で新たな価値を得て、普及し続けると共に、同音楽院がそれらを通して現代化を進め、教育機関としての特性を付与されることを示すことができる。なお、タンゴの新たな価値付けは、南米の音楽教育理論の観点から「脱植民地化」として捉えられる。今後、音楽専門教育のこの変化がアルゼンチンの学校教育に影響をもたらすことが期待される。

1. はじめに

筆者の出身国アルゼンチンの音楽教員養成は、欧米諸国と同様に、アーティストならびに教師の二元的な卒業生像 (Polifonia, 2010) が期待される制度である。つまり、音楽と教育の二つの専門性が両立される。それは、ヨーロッパ (特にイタリアとフランス) の「コンセルヴァトワール」(音楽院) に基づいた教育モデルであるが、西洋芸術音楽や読譜・暗譜に偏重した 19～20 世紀のそのモデルの適切さについては、20 世紀末以降ますます疑問視され、アルゼンチンを含めて数多くの国では、より幅広い学びの必然性 (Kingsbury, 1988; Hargreaves & North, 2001; Musumeci, 2002) が高くなってきた。

よって、学習内容の社会的な意義が再考され、あるいはその市場性が求められる中、音楽制作ソフトウェアの活用といったスキルや即興演奏等、総合的な音楽能力の必要性が叫ばれるようになった。さらに、卒業生の活躍領域が多様化すると共に、従来の音楽様式というカテゴリーに囚われぬ音楽受容も不可欠になっている。世界動向として、韓国ソウルで開催された第2回芸術教育世界会議（UNESCO, 2010）で合意された目標に示されたように、伝統的・現代的な芸術経験の価値を認識しつつ、学習者特有のコンテクストを最優先することが重要視されている。その背景では、アルゼンチンの諸音楽院でのポピュラーや現代音楽に関する教科が増え、専門教育の一環として南米民俗音楽（フォルクローレ）、ジャズ、アルゼンチン・タンゴ等、様々なジャンルを学ぶ機会が多くなった。

本稿では、アルゼンチンの首都にあるブエノスアイレス市立「アストル・ピアソラ」音楽院（スペイン語正式名：Conservatorio Superior de Música de la Ciudad de Buenos Aires “Ástor Piazzolla”）で進んできた学習内容の多様化を概観し、具体的にその多様化に関連したアルゼンチン・タンゴの位置付けに注目する。そのため、同音楽院の現行カリキュラム資料を収集し、タンゴの学習についての概念を抜粋し、19～20世紀の教育モデルからの脱出過程と関連付けて分析する。その資料調査を行った後、2021年に生誕100年を迎えるアルゼンチン人作曲家アストル・ピアソラ（1921-1992）をめぐる活動に言及する。最後に、ポストコロニアル理論、とりわけ南米の音楽教育における脱植民地的思想（Shifres & Rosabal-Coto, 2017）を受け、アルゼンチンに起こっている「コンセルヴァトワール」モデルの変革および現地の音楽の新たな価値付けについても考察する。

2. 教育におけるアルゼンチン音楽：タンゴに新たな価値付け

自然環境、民族、文化等が多様性に満ちたアルゼンチンは、他のラテンアメリカ諸国と同様に、先住民、スペイン系、アフリカ系等、多民族からなる国である。さらに、19世紀後半から20世紀前半にかけてのアルゼンチンの急速な経済成長に伴い、数百万人のヨーロッパ移民がそこに移住したことにより、移民の影響が強い。その中でも、イタリア人が多く、現在でもイタリア系はアルゼンチン人口のほぼ半分を占めている。このような混じり合いは正にハイブリッドでユニークな芸術表現の素になり、その一つは、ラプラタ川の港町ブエノスアイレスの最下層、特にその酒場や踊り場から生まれたとされるタンゴである。

蛇腹の楽器バンドネオンの響きで知られるこのジャンルは現在、世界でアルゼンチン文化を代表するようになったが、20世紀中まで、同国の教育制度においてほとんど認められなかった。当時の音楽専門教育では、アルゼンチン国民楽派¹を含めて西洋芸術音楽が学ばれ、学校教育では主に愛国

¹ フランスで留学を経て帰国したアルゼンチン人作曲家 Alberto Williams（1862-1952）や Carlos López Buchardo（1881-1948）等。

唱歌とアルゼンチン中部・北部の民俗音楽（フォルクローレ）が歌われていた。すなわち、学校教育では明確な国民性を伝える目的で、特に声楽の中で郷土伝統に関連した曲が適切（de Couve, Dal Pino & Gazzano, 2014）とされたものであり、その一方で、首都圏のタンゴは、全国的でない音楽、また、港町の淫らな音楽として捉えられて蔑視されていた。ゆえに、学校から門戸を閉ざされ、「コンセルヴァトワール」モデルの専門教育機関でも学びの対象にならなかった。

一方、タンゴは学校外において、オーケストラの旺盛な活動と共に、特に1930～40年代に大流行した。以後、徐々に人気を失っていったものの、1970年以降、「タンゴの革命児」アストル・ピアソラによってタンゴの現代化が成し遂げられた。作曲家・バンドネオン奏者であったピアソラは、自らの音楽様式を追求して楽壇と戦い、タンゴに芸術音楽やジャズ、現代音楽を融合させた斬新な響きによって国際性を強め、タンゴの変革における最も重要な人物として、アルゼンチン国内はもとより、世界的に評価されるミュージシャンとなった。

また、タンゴは現在、他のジャンルとの壁が取り払われ、時代と共に国内外で発展し続けている。世界中にある数々のタンゴ踊り場・ライブハウスに加えて、エレクトロタンゴ、ネオタンゴ、同性同士のタンゴ・ダンス等々の普及がその開放性、活発性の証であろう。さらに、ブエノスアイレスでは2003年以降、毎年「タンゴ・ダンス世界選手権」が開催されており、タンゴは2009年からユネスコの世界無形文化遺産にも登録されている。よって、現在、タンゴがアルゼンチン、特にブエノスアイレス市の文化的多様性のシンボル、そして、保存されるべき文化財となっていることは明らかである。

しかしながら、タンゴの発祥地ブエノスアイレスの学校音楽教育では、その普及は未だに実現していない。2000年代以来、全国的にインクルーシブ教育、ダイバーシティ（多様性）そしてラテンアメリカ人としてのアイデンティティの育成（de Couve, Dal Pino & Gazzano, 2014）が進んできたものの、それは必ずしも学校におけるタンゴの普及・発展に貢献しているわけではない。学校教育でのタンゴの位置付けについては、次節のようにまとめることができる。

3. ブエノスアイレス市の初等・中等教育におけるタンゴの位置付け

ブエノスアイレス市のカリキュラムでは、幼稚園と初等教育（7年間のプライマリー）の音楽科は必修であり、「表現」「鑑賞」「背景付け」²という3つの領域で構成されている。そして、中等教育（5年間のセカンダリー）の音楽科は、全学年で必修ではないが、各学校のカリキュラムによって「芸術教育」の枠内で幅広く履修されている。全国では、義務教育（4～17歳、14年間）における音楽科の学習内容が教育省によって「優先学習項目」として設定されるものであるが、その実践

² 背景付け（contextualización）とは、音楽作品とその文化的・歴史的・社会的コンテクストとを関連付ける領域である。同領域では、様々な環境における人間の思考・表現・アイデンティティとして音楽作品とその特徴にアプローチする。「創作」「鑑賞」「背景付け」の3つの領域は補完的であり、音楽科および芸術教育に不可欠とされる。

には柔軟性がある。タンゴの学習内容については、すべての教育段階で「都市音楽」（*música ciudadana*）として規定されているが、音楽科のカリキュラムが単なるガイドラインとして捉えられるため、画一的に実施するものではないとされる。また、教員が授業づくりの自由度が比較的高いので、タンゴの実際的な普及は学校によって異なり、一部の教員しか取り入れていないと言えよう。それでも、タンゴを中心とした取り組みが少しずつ増えていることは確かである。

例えば、何人かの教員は初等・中等学校で自発的に、タンゴと現地の社会的・文化的なトピックをめぐる教科横断的なプロジェクトを立ち上げている。ねらいとしては、主に、児童・生徒の音楽的視野を拡大し、表現力・創造力を高めることが挙げられ、バンドネオンや、タンゴの音楽形式、曲想、歌詞が伝える地元の雰囲気等が注目される。また、伝統的なタンゴも、子供向けのタンゴも歌われる。授業におけるタンゴのダンスは、かなり稀であるが、学校行事として大人も子供もタンゴを踊る事例もある。さらに、*Quiero al Tango* 団体によって、すべての小学校でタンゴの学びを強化する提案が推し進められているが、その取り組みの効果が見えるとはまだ言い難い。また、国内で相次ぐ文化予算削減を乗り越えることも望まれる。

一方、課外活動としては、タンゴを含む様々なアウトリーチ活動が確認されている。その一つは、コロナ禍の前にブエノスアイレス市教育省の後援で実施された「*Qué milonga!*」というプロジェクトである。その取り組みでは、市内のいくつかの学校でタンゴに関する授業やコンサートが行われ、そして、義務教育未修了の社会人向けのいわゆる成人学校で小規模のタンゴ・オーケストラが形成された。その際、タンゴは各学校コミュニティの生活を豊かにするもの、また、感情的な支えを与えるものとされる。それは、アイデンティティの育成のみならず、社会的格差が大きいアルゼンチンにおいてインクルーシブ教育として捉えられ、特に低所得層を対象とするものであった。

このように、ここ 20 年程度、学校教育では多様性が促進され、国民性やアイデンティティが再構築されるに伴い、学校内のアルゼンチン音楽には新たな価値付けがされつつある。併せて、音楽に携わる高等教育機関の学習内容も多様化され、以前より積極的にタンゴ等が学ばれるようになってきた。このような流れの中で、アルゼンチン音楽が現代音楽やテクノロジーと共に、音楽専門教育機関における現代化の柱の一つとなったと言える。一例として、筆者が 2014 年から 2017 年にかけて勤務したブエノスアイレス市立「アストル・ピアソラ」音楽院に焦点を当てる。

4. ブエノスアイレス市立「アストル・ピアソラ」音楽院

この高等教育機関は首都にあり、2007 年から「アストル・ピアソラ」の名が音楽院名に公式に加えられた。また、2014 年以來、音楽院図書館に学生用の楽譜・資料を提供するピアソラ財団との提携協定も結ばれ、その作曲家に関する活動が増え始めた。

ブエノスアイレス市文化省芸術教育庁（DGEArt）の下に置かれている同音楽院の学費は、完全に無料である。また、全国的に教育を受ける権利が保障されているため、アルゼンチンの他のすべての公教育も同様に無料で受けられる。主な目的として、音楽教員養成課程に携わるが、さらに、

課外講座・生涯教育活動（学生楽団、室内音楽アンサンブル、合唱団、諸々の講演等）を通して、ブエノスアイレスの文化の発展・普及への貢献も目指している。その音楽教育観は次のように記述される。

教授力を中心とした教育実践の改善には、現代の文化・科学・技術の革新と社会における変化に即した教員養成が必要となっている。当音楽院における専門教育は、様々な時代背景等の音楽を採り入れ、（中略）音楽が単一で不変なものでなく、文化的制作物として協働的に再現・再構築され得るものであることを考慮する。（GCABA, 2015, p. 788 筆者訳）

5年間のその教員養成課程では、アルゼンチンのあらゆる教育段階（幼稚園・初等・中等・芸術専門教育・特別支援教育・高等教育）で音楽専門教員として活躍できる免許が取得できる。また、その卒業生は、学校教育と専門教育で勤務することもできれば、それぞれの専攻によって様々な芸術分野でアーティストとして活躍することもできるとされる。

教員養成課程は、器楽（バンドネオンを含めて19の楽器）、室内音楽、音楽情報科学、ミックスメディア作曲、音楽制作の5つの専攻を擁する。また、現行カリキュラムには、3つの学習領域があり、それらは、一般的養成領域（一般教育学、哲学・美学、教育心理学、アルゼンチン教育史、性教育、教育政策、ICT等の教科）、専門的養成領域（和声、対位法、音楽形式、音楽史、音響学、音楽教授法および各専攻固有の教科）、実践領域（各教育段階における実習）である。その教科の過半数は通年科目で、合計64時間（週に2時間）の授業である。

アルゼンチン音楽に関する内容は、器楽・室内音楽専攻の複数の必修教科にも、全専攻共有の選択教科にも組み込まれている。一方、課外活動の一つが、近年開講されたタンゴ・オーケストラ（Orquesta de tango）、つまりタンゴに特化した学生楽団であり、多くの学生から注目を集めているものである。本研究では、タンゴに関する内容が学ばれる「フォルクローレ・都市音楽」「タンゴ即興演奏」「ピアソラ楽曲分析・演奏」という教科に着目する。次の3節では、その教科の詳細をまとめる。

4.1. フォルクローレ・都市音楽 (Folclore y música ciudadana)

この必修科目では、アルゼンチンの首都圏と農村部両方の伝統的なジャンルが学ばれる。前者はタンゴおよびその関連ジャンルであり、後者はチャカレーラ、クエーカ、ワイノ³等の南米民俗音楽ジャンルに相当する。両方ともアルゼンチンとラテンアメリカの音楽として把握されるが、その起源を考えると、タンゴは首都圏（ラプラタ川周辺）で発祥したものであるが、一方、フォルクローレはそれ以外の地方にルーツをもっているものである。にかかわらず、現代のフュージョンに鑑み

³ チャカレーラ (chacarera) はアルゼンチンの北西・中央部、クエーカ (cueca) はチリ・ボリビア・アルゼンチンの民族舞踊である。2拍子 (6/8) と3拍子 (3/4) が同時に進行することが特徴。一方、ワイノ (huayno) またはワイニョは、ケーナ、サンポーニャ、チャランゴといった楽器を使う2拍子の音楽様式。ペルー・ボリビア・北チリ・北西アルゼンチンで盛んである。

て、それらの境界が緩やかに捉えられ、初期のタンゴに影響を与えたジャンル（ミロンガやカンドンベ）⁴と共に、すべてが同じ教科内で学ばれる。

必修の通年科目であり、その時間数は週に2時間、合計64時間である。主な履修目標としては、学習者が様々な場面によってアルゼンチン民俗音楽（フォルクローレ）と都市音楽を教育的・芸術的にふさわしく演奏・合奏・編曲する能力を身に付けることが挙げられる。その際、伝統音楽とポピュラーの都市音楽の伝承・発展が強調される。カリキュラムで規定されたこの教科のねらいと学習内容は、以下の通りである。

ねらい	<ol style="list-style-type: none"> 1) アルゼンチンのフォルクローレ・都市音楽の様式や形式の特徴を示すことができる。 2) 様々な楽器編成で、アルゼンチンとラテンアメリカの民俗音楽ならびに都市音楽を再現・合奏・編曲することができる。 3) フォルクローレと都市音楽の編曲（トランスクリプション・アレンジ）等を演奏することができる。
主な学習内容	<p>フォルクローレ・都市音楽の作品に応用できる再現・演奏・編曲（トランスクリプション・アレンジ）の仕組み・方法。創作的仕組みとしての編曲と即興演奏。創作の出発点となる、これらのジャンルにおける柔軟な楽器編成。タンゴ・オーケストラとそれ以外の楽器に合わせた演奏の可能性。時代の変遷に連れた各ジャンルにおける演奏法。独奏や伴奏のための編曲に採用できる美的・様式的な基準。</p>

(GCABA, 2015, p. 831 筆者訳)

4.2. タンゴ即興演奏 (Improvisación en lenguajes populares: Tango)

この教科では、タンゴの基本的特徴を受講者に理解させることが目的とされる。そして、タンゴの起源から現在までの概要について学ぶ。選択の通年科目であり、その時間数は1週間に2時間、合計64時間である。

ねらい	<ol style="list-style-type: none"> 1) タンゴのリズム、旋律、和声、形式を構成する要素を理解する。 2) 様々な楽器編成でタンゴの象徴的な作品を演奏・合奏する。 3) このジャンルの特性を尊重し、即興演奏に応用できる仕組み・技能を習得する。
主な学習内容	<p>ラプラタ川地域の音楽。タンゴの起源。タンゴの時代区分とその派生。アルゼンチン人作曲家の作品におけるタンゴの要素。エレクトロアコースティック音楽に組み込まれたタンゴの要素とその意味的価値。タンゴのリズム、旋律、和声、形式を構成する要素。タンゴ特有な楽器編成。タンゴにおける即興とは。</p>

(GCABA, 2015, p. 830 筆者訳)

⁴ 大草原パンパに生まれたミロンガ (milonga) は、ラプラタ川地域 (アルゼンチン・ウルグアイ) の2拍子のジャンル。また、アフリカ起源のカンドンベ (candombe) では、太鼓が代表的な楽器である。

カリキュラムで示されるように、この教科では学習者によるタンゴ演奏・合奏が即興演奏の学びにつながる。また、実践的な側面が重要とされることも特徴である。この点については、19～20世紀の「コンセルヴァトワール」モデルではあまり対応されていない即興演奏とポピュラー音楽の学習を通して、総合的な音楽能力の獲得が要求されていると言える。一方、学習内容の中に見られる西洋の芸術音楽ジャンル「エレクトロアコースティック音楽」という概念では、オーディオ・テクノロジーを含む現代アートとタンゴとの関連性が教えられる。そして、最終的に、ジャンルの壁を取り払う豊かな音楽性の育成が目指される中、卒業生がより多様な領域で活躍できるようになることが期待されている。

4.3. ピアソラ楽曲分析・演奏

(Análisis e interpretación de la obra de Astor Piazzolla)

この教科では、他教科の学習内容（和声、音楽形式、演奏技能、音楽史等）が特定のレパートリー、つまり、アストル・ピアソラの曲に応用される。特に分析と合奏の2つの側面が重要とされる。担当しているエミリアノ・グレコ教授はタンゴの専門家で、ピアニスト・アレンジャー・指揮者として国内外で活躍している。

選択の通年科目であり、その時間数は週に2時間、合計64時間である。履修者は、楽器を問わず、ピアソラの曲を選び、鑑賞・分析・合奏し、それから期末演奏会で発表する。その中、ピアソラの「リベルタンゴ」「アディオス・ノニーノ」「ブエノスアイレスの四季」等の名作が発表されることが少なくないが、他の曲も原曲・編曲で合奏される。カリキュラムで規定されたこの教科のねらいと学習内容は、以下の通りである。

ねらい	1) ピアソラによる作品におけるリズム、旋律、和声、音楽形式、スタイル等の特徴的な要素を理解する。 2) ピアソラの音楽の演奏・合奏に応用できる特定の技能および表現技法を習得する。 3) 作曲に用いられる音楽的仕組みの分析法を習得する。
主な学習内容	ピアソラ作風の複数の時期を代表する曲におけるリズム、旋律、和声、音楽形式の分析。タンゴの伝統的な構成を脱出する「開かれた形式」。タンゴに組み込まれた対位法の要素。ピアソラの曲に応用できる演奏技能、フレージング法、強弱法およびテンポの扱い方。様々な楽器編成。編曲の実践と合奏。

(GCABA, 2015, p. 829 筆者訳)

音楽専門教育機関における教科が一人の作曲家に焦点を当てるのが国際的に少ない中、ピアソラに関するこの教科は、2014年に初めて開講され、世界唯一のピアソラに特化した教科となった。この点では、ポピュラーや現代音楽等の要素を融合させた作曲家であることを考慮し、音楽院の枠

内でその意義を把握することができる。以上のことを踏まえて、公教育におけるアルゼンチン音楽が新たな価値付けを受ける中、ブエノスアイレス市立音楽院がピアソラに関する学びを促進して先駆的な役割を果たしていると述べても過言ではなからう。

5. ピアソラ生誕 100 周年を迎えて

アストル・ピアソラは 1921 年、ブエノスアイレスから約 400 km 南にあるマル・デル・プラタ市で生まれた。2021 年は彼の生誕 100 周年である。すでに音楽家として世界的な評価と名誉を得ているピアソラのこの記念すべき年には、本来ならば世界中の各地でたくさんの祝福のイベントが開催されるはずであったが、コロナ禍という不幸な出来事が地球全体を襲ったために、その多くが中止されてしまった。しかし、それでも生国のアルゼンチンでは、コンサートはもちろん、学生の教育に向けた企画が実施されている。中でもブエノスアイレス市では、コロソ劇場での特別記念コンサート・シーズン Piazzolla 100 をはじめとする各種のイベントが相次いでいる。それらは、市立音楽院の前述の教科および課外活動における実践を発表する機会とな

っている。また、市立音楽院は新型コロナウイルス感染防止対策によって 2020 年から主としてオンライン授業に移行していたが、3 月 11 日のピアソラの誕生日に音楽院施設が再開された。当日には、教授・学生の共同コンサートで Five Tango Sensations（弦楽四重奏とバンドネオン、1989 年作）が演奏され、初めて国内で録音・録画された。その共同コンサートは「ピアソラ音楽院でのピアソラ」（Piazzolla en el Piazzolla）というコンサート・シーズンの幕開けともなった。

さらに、遠隔授業が続く中、2021 年を通して講演、ビデオ発表、コンクール等、数多くのイベントが開催される予定である。そのイベントのすべては録画され、インターネット上で公開される。もちろん、無料で鑑賞することができるので、ピアソラの音楽と共にブエノスアイレス市立音楽院の活動を世界中で広める機会となる。このようにして、市立音楽院は、コロナ禍における「新しい日常」に対応しつつ、ピアソラやタンゴのアルゼンチン性ならびに国際性の双方を両立させている。また、ピアソラはタンゴの保守的な見方を超えて新しいタンゴ観を生み出した人物であるが、現在、



▲ピアソラ生誕 100 周年記念コンサート・シーズ

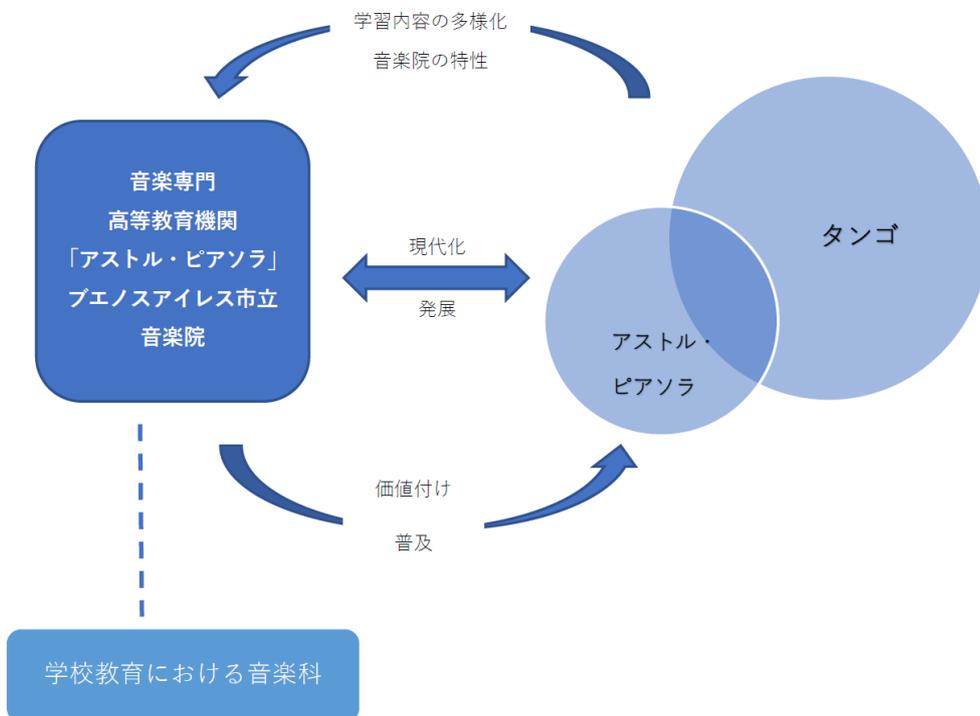
市立音楽院はピアソラに関する学びを促進しながら、現代だけではなく未来にもつながる教育機関を目指している。

6. 考察：現状と今後の課題

以上のことから、ブエノスアイレス市立音楽院の教育課程におけるアルゼンチン音楽の価値付けについてまとめてみたい。まず、カリキュラムからは、その教育機関においてクラシックやポピュラー、国内外の音楽が共存しており、また、それらの境界が緩やかなものになりつつあることがわかる。この事情は、アルゼンチン文化とピアソラの音楽を構成する要素の多様性と関係して解釈できる。さらに、ブエノスアイレス市立音楽院が確かに、国際的動向に合わせて、音楽教育の多様化に向けた改革を進めていることが確認できる。それに加えて、第4節で見た3つの教科の担当教員は、芸術音楽とポピュラー音楽の専門家であり、カリキュラムを実施する自由度が高いため、授業内容やレパートリーを学生の専攻、あるいはそのニーズに合わせて適応できる柔軟性をもっている。また、学生が公演したり、ポピュラー音楽についての課外講座に参加したりする機会も与えられるので、音楽専門高等教育の多様化を促す環境となっていることが考えられる。

ここでは、アルゼンチン音楽（特にタンゴとピアソラの音楽）と同音楽院との間に相互関係が見られる。具体的に、両方が互いに現代化し合い、発展させ合うプロセスである。一方では、音楽院がアルゼンチン音楽の学習を強化することで、教育機関としての特性を付与され、「コンセルヴァトワール」モデルを超えて現代化を進める。そこで、地元の音楽が昨今、新たに価値付けられている

ことから、音楽院は学生の活躍領域を拡大させ、また、学生を音楽家・教師としてより豊かに育成させることができる。そして、他方では、タンゴとピアソラの音楽が専門高等教育に組み込まれることで、新世代の間で発展し、普及し続けると考えられる。この相互関係は、次の通りに図解されよう。



▲ブエノスアイレス市立「アストル・ピアソラ」音楽院におけるタンゴの位置付け 筆者作成

さらに、ブエノスアイレス市立音楽院の取り組みに鑑みて、それが特に音楽専門高等教育におけるアルゼンチン音楽の普及が進んでいると考えられるが、学校教育にも影響をもたらしているとは言い難い。実際には、同国の学校では、多くのポピュラー音楽ジャンルが扱われているにもかかわらず、タンゴの推進・強化は未だに実現されていない。すでに述べたように、タンゴに関するプロジェクトは存在するが、ほとんど教員の自発的な取り組みとして行われている。そして、学校教育内でタンゴに関するプロジェクトができていくからといって、必ずしも音楽院の学生にそのようなプロジェクトへの参画が求められるわけではない。よって、アルゼンチン音楽という点では、学校と音楽院の間に隔たりがあると言わざるを得ない。今後、音楽院でのタンゴをめぐる取り組みが、義務教育でも変化を起すものになることが期待される。そのため、特に実習を通して、音楽院と学校との連携を強めねばならないであろう。

最後に、音楽院におけるタンゴについて、南米の思想から考察する。この点では、ポストコロニアリズムまたは脱植民地的思想 (Shifres & Rosabal-Coto, 2017) に関連付けて考える。その理論では、「ヨーロッパ中心主義」、つまり、西欧のモダン（近代的）な世界観から生まれた音楽教育が批判される。よって、西欧の植民地主義に反した音楽教育の実践を「復旧・可視化・検討・構築すること」（前掲書 筆者訳）が目標とされる。もちろん、1816年にスペインからの独立を獲得したアルゼンチンでは、文字通りの「植民地主義」に対して反発するものではなく、西欧の教育モデルの中に潜んだ権力関係、とりわけ西洋芸術音楽を中心とした「コンセルヴァトワール」モデルに残っている偏見からの脱却となる。だが、従来のモデルにおけるローカルな文化的要素が比較的低い価値を与えられ、そして長い間、音楽家・教員の養成課程から除外されるものであったため、このパラダイム転換が象徴的な意味で、19世紀まで南米を支配下に置いた者からの「解放」として把握される。

その上、この思想では、「植民地化」と「モダニティ」（近代性）との間に関係があると見なされる。よって、「脱植民地化」はヨーロッパ中心主義に反対し、ローカルな文化の従属的役割を訴えることで、ポストモダン理論に基づいた視座を採る。これについては、脱植民地化が「植民地主義の隠然たる勢力を発掘し撤去するプロセスである」（前掲書 筆者訳）と述べられ、それゆえに、従来のモデルにおける「思想・情緒・行動の捉え方」を変えるものとされる。ところが、本研究の事例では、西欧のモデルからの脱出といえども、事実上、教育機関の土台まで至る変化のようには見えない。将来、さらにローカルな文化要素が組み込まれること、また、Conservatorio という名すら変わることがあり得ると筆者は考えるが、実際には、必ずしも西洋芸術音楽がカリキュラムから消えるわけではないであろう。今後、ブエノスアイレスの音楽専門教育機関が従来のモデルを離れて、どのような形になるかを検討していく必要があると言えるであろう。

7. おわりに

アルゼンチンに次いでタンゴをよく聴く日本は、昭和初期からタンゴへの感度（生明 2018）が高く、現在までタンゴをめぐるイベントやダンス・サロンも比較的盛んである。さらに、文部科学省検定教材を調査すると、ピアソラの「リベルタンゴ」が高等学校の教科書（教育芸術社 2017）に採用されていることが注目に値する。それは、平成から学校音楽教育に導入された「国際理解」すなわち、日本と諸外国の音楽文化の尊重を促す学習内容として捉えられるが、ピアソラ生誕 100 周年を迎える今年は、アルゼンチン国内外で発展し続けるタンゴに新しく目を向けるきっかけとなる。

本研究では、発祥地ブエノスアイレスにおけるタンゴの学習を中心として、その現状について考察し、日本でタンゴ研究を活発化することに貢献できるよう期待する。また、日本・アルゼンチン間の交流には大きな発展の余地があると考えられるので、筆者は将来、音楽教育とタンゴを通じて二国間の研究交流を促進したい。

参考文献

生明俊雄（2018）『タンゴと日本人』集英社

教育芸術社（2017）『高校生の音楽 1』文部科学省検定済教科書

de COUVE, A.; DAL PINO, C. & GAZZANO, A. (2014) An Historical Overview of Music Education in Argentina. Robin Stevens (Ed.), *International History of Music Education*. History Standing Committee, International Society for Music Education (ISME).

GCABA (2015) Plan Curricular Institucional (PCI). Profesorado de Educación Superior en Música con Orientación en Composición con Medios Mixtos. *Boletín Oficial de la Ciudad de Buenos Aires N. 4785, Anexo-Resolución N.530/SSGEC/15*, pp.787-850.
<https://documentosboletinoficial.buenosaires.gov.ar/publico/20151218ax.pdf>

HARGREAVES, D. J. & NORTH, A. C. (2001) *Musical Development and Learning: The International Perspective*. London: Continuum.

KINGSBURY, H. (1988) *Music, Talent and Performance: A Conservatory Cultural System*. Philadelphia: Temple University Press.

MUSUMECI, O. (2002) Hacia una educación de conservatorio humanamente compatible. *Actas de la 2da. Reunión Anual de SACCoM (Sociedad Argentina para las Ciencias Cognitivas de la Música)*.

Polifonia (2010) *Instrumental and vocal teacher education: European perspectives*. Utrecht: Association of European Conservatoires (AEC) Publications.

SHIFRES, F. & ROSABAL-COTO, G. (2017) Hacia una educación musical decolonial en y desde Latinoamérica. *Revista Internacional de Educación Musical*, vol. 5, pp. 85-91. <https://www.academica.org/favio.shifres/364>

UNESCO(2010) *Seoul Agenda: Goals for the development of arts education*.

http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/CLT/pdf/Seoul_Agenda_EN.pdf